

外国ルーツゆえの悩み 利点は

飯野高卒業生 進路で助言

外国にルーツを持つ高校生らが、卒業生の体験談を通じて、仕事などへの理解を深める「就職・進学セミナー」が、鈴鹿市三日月町の飯野高校で開かれた。日本語学習や進学、就職など、外国にルーツを持つ生徒が悩む問題に、社会で活躍する先輩がエールやアドバイスを送った。

(沢井秀之)



自らの経験について話す、(右から)森国さん、林さん、鈴鹿市三日月町の飯野高で

日本語上達を/多文化知識 強み

英語コミュニケーション科の1年生約70人が耳を傾けた。冒頭、鈴鹿市で外国人の支援活動をしているNPO法人愛伝舎(四日市市)の坂本久海子理事長が、非正規と正規社員で、給与や社会保険などの待遇が大きく差が出ることを説明した。

卒業生として登壇したのは、社会福祉協議会に就職した林マツミさん(24)と、四日市市采女が丘4と、大津市で自動車部品試作会社就職予定の森国ユミさん(22)と、鈴鹿市稲生こがね園、半導体大手に勤務する原田来夢さん(20)と、四日市市笹川9、自動車整備士として働くコスタ・チャリーさん(20)と、亀山市阿野田町の4人。

4人は二手に分かれて、生徒たちに自らの体験を説明。林さんは奨学金を活用

しながら大学に通うことを考えていたが、入学前に入学金の存在を知り、困った経験を明かし「お金の面で両親と話す場を持った方がいい」と話した。

原田さんは、社会人になり日本語を使う場面が多いことから「自分は日本語が苦手だったが、漢字は使わないといけない。毎日、日本語にチャレンジしてほしい」と訴えた。

生徒たちから「社会に出て、差別がないのか」と聞かれる場面もあった。原田さんは「ゼロではない。めっちゃめっちゃ勉強して会社に貢献すれば、上の立場になれる。私はできるんだという気持ちを持ってほしい」。チャリーさんは「何力国語がしゃべれるか聞いてみると良い。自分たちはいろんな言語、文化を知っている。差別をする人を気にしなくていい」と呼びかけた。

セミナーは、県教委の委託を受け、愛伝舎が開いた。

1年生70人が耳傾ける